

# 音楽教育とわらべ歌： 山口のわらべ歌に関するアンケート調査をもとに

大冨 智子\*・安原 雅之

Music Education and Warabe-uta: a Study Based on the Questionnaires  
on the Warabe-uta in Yamaguchi

OTOMI Tomoko and YASUHARA Masayuki  
(Received June 18, 2003)

キーワード：音楽教育、わらべ歌

平成14年度から施行されている学習指導要領で「和楽器」の使用が求められたことにより、音楽教育における日本音楽のあり方が注目を集めている。本論は、そのような脈絡において、日本の「わらべ歌」の音楽教育における教材としての可能性について考察することを目的とするものである。

## 1. 「わらべ歌」とは

「わらべ歌」とは、古くから子供たちによって歌い継がれてきたものであるが、ここでまず、「わらべ歌」とは何かということを明確にしておきたい。

『広辞苑』によれば、わらべ歌は、次のように定義される。

- (1) 子供たちの歌う歌。昔から子供たちに歌われて来た歌。
- (2) 子供たちに歌って聞かせる歌。<sup>\*1</sup>

このような子供の歌としては、「童謡」も考えられるが、「童謡」と「わらべ歌」の相違点として、創作の経緯の違いを挙げることができよう。つまり、作者（作詞家および作曲家）が子供のために創った「童謡」に対して、「わらべ歌」は一般に作者不詳で、もし作者がわかっている場合でも、作者の存在は基本的に問題とされない。換言すれば、「童謡」があくまで「作品」として継承されるのに対して、「わらべ歌」は民間伝承されてきたものである。そのため、「わらべ歌」は伝承の過程において歌が変化したり、また、地域や集団によって創りかえられたり、新しいものが創られたりするものである。

そのような「わらべ歌」にもいろいろな種類があり、『音楽大事典』では、それらは次のように分類されている。

---

\* 山口大学大学院教育学研究科

### (1) 遊び歌

1. ことば遊び歌：『どれにしようかな』など。
2. 絵かき歌：『みみずが三匹よってきて』など。
3. おはじき・石けりの歌：『いっちょすい、にちょすい』など。数は少ない。
4. お手玉・羽根つきの歌：『おさらい』『ひとり来な』など。
5. まりつき歌：『あんた方どこさ』など。
6. なわとび・ゴムなわとびの歌：『おじょうさんお入り』など。
7. じゃんけん・グー・チョキ・パー遊びの歌：『じゃんけん、じゃがいも』など。
8. お手合せ歌：『せっせっせ』『アルプス一万尺』など。
9. からだ遊び歌：『あがり眼さがり眼』など。
10. 鬼遊びの歌：『かごめ』など。

### (2) 自然や動・植物の歌

1. 自然に歌いかける歌：『明日天気になれ』など。
2. 動・植物に歌いかける歌：『からすからす勘三郎』など。

### (3) 年中行事の歌

『亥のこ』など。<sup>\*2</sup>

上記の分類からもわかるように、「わらべ歌」の多くは遊び歌であり、また、ほとんどは日本で生まれたものであるが、1970年代に普及した『アルプス一万尺』のように、本来はアメリカの民謡であるものが「わらべ歌」として定着した例もある。

民間の伝承文化としてのわらべ歌は、学術的な研究対象となってすでに久しい。初期の代表的な研究としては、町田嘉章、浅野建二著の『わらべうた-日本の伝承童謡』（岩波文庫、1962年）や小泉文夫編の『わらべうたの研究』楽譜編、研究編（わらべうたの研究刊行会、1969年）が挙げられる。そのような研究は全国的な広がりを見せ、水野信男の『中海周辺および隠岐・わらべうたの研究』、泉健の『和歌山のわらべうたの研究』など、全国の各地域のわらべうたを対象とした研究が多く見られるようになった。そのような中、1987年から1991年にかけて刊行された『日本わらべ歌全集』は、伝承されるわらべ歌を各都道府県ごとに採集し、歌詞・楽譜と民俗伝承や遊び方などの解説を付けてまとめたわが国初のわらべ歌全集である。

この全集の第19巻（下）は『山口のわらべ歌』であり、山口県内各地で採譜されたわらべ歌の楽譜と、それらに関する解説がまとめられている。

本書では、わらべ歌は次の12種類に分類されている。

1. 遊びのはじめ
2. 手まり歌
3. 羽根つき歌 お手玉歌
4. 手遊び歌
5. 鬼遊び歌
6. 縄とび歌

7. 外遊び歌
8. 自然の歌
9. 動物 植物の歌
10. 歳時歌
11. ことば遊び歌
12. 子守歌\*<sup>3</sup>

本書に掲載されているわらべ歌全215曲のうち、山口市で採譜されたものは123曲ある(「山口市のわらべ歌：種類別一覧」を参照)。

わらべ歌は、本来口承されるものである。そのため、確定した旋律が、厳密に伝えられるとは限らない。全国的に普及しているわらべ歌についても地域によって、歌詞や旋律など多少異なっている場合もある。『山口のわらべ歌』に掲載されているわらべ歌も例外ではない。

そこで、『山口のわらべ歌』所収の山口市で採譜されたわらべ歌が、今の子どもたちにどの程度伝わっているかを調べるために、山口大学教育学部附属幼稚園で園児を対象に調査を行った。幼稚園児を調査対象として選んだのは、4～6歳という年齢がわらべ歌を歌って遊び始める年頃だと考えたからであり、筆者が在籍する大学の附属機関である山口大学教育学部附属幼稚園に協力をお願いした。

山口市のわらべ歌：種類別一覧

1. 遊びのはじめ（全10曲中山口市で採譜されたものは8曲、以下同様）

- 『かくれごせるもな』（人寄せ歌）
- 『ジャンケンホイ』（ジャンケン歌）
- 『ジャンケンもって』（ジャンケン歌）
- 『いっぽてっぽ〔一〕』（鬼きめ歌）
- 『いっちこたいちこ』（鬼きめ歌）
- 『ひとりふたり』（鬼きめ歌）
- 『つうつうたこの』（数とり歌）
- 『ひいにふうに』（数とり歌）

2. 手まり歌（全39曲中14曲）

- 『船の船頭さんに』
- 『一つ人びと』
- 『一つひよどりや〔一〕』
- 『ひいふの三吉』
- 『一番はじめが』
- 『おんしらしらしら』
- 『西や東の』
- 『あんたがたどっこさ』
- 『山のちょんちょんぎす』
- 『れんげ女郎』
- 『ござれ友達』
- 『向かいの山へ』
- 『向かいの米屋の』
- 『とんとんたたくは』

3. 羽根つき歌 お手玉歌（全14曲中3曲）

- 『ひいやふうや』（羽根つき）
- 『ひとりきな』（羽根つき）
- 『おひとつおとして〔二〕』（お手玉）

4. 手遊び歌（全22曲中13曲）

- 『せっせっせ〔二〕』（手合わせ）
- 『一つひよこが』（手合わせ）
- 『じゃんすけさん』（ジャンケン遊び）
- 『だるまさだるまさ』（顔遊び）
- 『おおやぶこやぶ』（顔遊び）
- 『子供と子供と』（指遊び）
- 『一が刺した』（指遊び）
- 『一山越えて〔二〕』（指遊び）

- 『三重の重箱に』（指遊び）
- 『ありの道や』（絵かき歌）
- 『のりこんで』（絵かき歌）
- 『一さ一さ』（絵かき歌）
- 『まるかいてチョン〔一〕』（絵かき歌）

5. 鬼遊び歌（全8曲中3曲）

- 『かごめかごめ〔一〕』（人当て鬼）
- 『おにさんこちら』（目かくし鬼）
- 『ようかくれ』（かくれ鬼）

6. 縄とび歌（全7曲中3曲）

- 『たわらのねずみ』
- 『おじょうさん〔二〕』
- 『郵便屋さん』

7. 外遊び歌（全16曲中7曲）

- 『ひらいたひらいた』（輪遊び）
- 『山の婆山の婆〔一〕』（たこあげ）
- 『山の婆山の婆〔二〕』（たこあげ）
- 『あいつら』（むくろじ遊び）
- 『かまつくろ』（砂遊び）
- 『てんてんてん車』（手車遊び）
- 『ここは大海の』（通せんぼ）

8. 自然の歌（全6曲中5曲）

- 『夕やけこやけ』（夕やけ）
- 『日がさ雨がさ』（ ）
- 『子ども風の子（冬）』
- 『雪こんこんこ』（雪）
- 『天の川原の』（星）

9. 動物 植物の歌（全18曲中15曲）

- 『かいちぶろ』（かいつぶり）
- 『ひとらの子供は』（つばめ）
- 『ちんちろべんけい』（ほおじろ）
- 『きいきいもんずが』（百舌）
- 『ひんかちゃひんでも』（じょうびたき）
- 『ほうほうほたる来い〔一〕』（ほたる）
- 『ほうほうほたる来い〔三〕』（ほたる）
- 『でんでんむし』（かたつむり）
- 『おとこなら山行け』（精霊ばった）
- 『ちょうちょうば』（蝶）
- 『西むけ長次郎』（さなぎ）

- 『そおとめそおとめ』(水すまし)  
 『わらびさわらびさ』(わらび)  
 『たゆうさたゆうさ』(松)  
 『梅干ゆ食べても』(梅)
10. 歳時歌 (全13曲中8曲)  
 『どんどん焼きや』(どんど焼き)  
 『なるかならんか』(成り木責め)  
 『鬼ゃあそと』(節分)  
 『おしゃかさま』(涅槃会)  
 『正月三日』(祭り)  
 『太郎兵衛が』(餅)  
 『亥の子たのこ〔一〕』(亥の子)  
 『亥の子たのこ〔二〕』(亥の子)
11. ことば遊び歌 (全39曲中36曲)  
 『一つひいた豆』(数え歌)  
 『一つ冷や飯』(数え歌)  
 『うさぎさうさぎさ』(尻取り歌)  
 『そうだそうだ』(地口歌)  
 『わしかたの』(地口歌)  
 『みかんきんかん』(地口歌)  
 『京の三十三間堂にゃ』(早口ことば)  
 『高野の弘法大師が』(早口ことば)  
 『などなどなあに』(なぞなぞ)  
 『しいびりしいびり』(まじない)  
 『お前の指ゃ』(まじない)  
 『初わらびはみ食うな』(まじない)  
 『なにもかも』(まじない)  
 『にごり水は』(まじない)  
 『もつれんな』(まじない)

- 『福德世帯』(占い)  
 『どちらがよいか』(占い)  
 『あんなね一ま』(からかい歌)  
 『いま泣いた鳥が』(からかい歌)  
 『いろはに金平糖』(からかい歌)  
 『上のもな』(からかい歌)  
 『ええこと聞いた』(からかい歌)  
 『拾うたもな』(からかい歌)  
 『おしゃれしゃれても』(からかい歌)  
 『男と女子と』(からかい歌)  
 『お泣きびいびら』(からかい歌)  
 『女子まさの』(からかい歌)  
 『ぬか歯の抜けた』(からかい歌)  
 『屁ひりぼ』(からかい歌)  
 『まねしこんごろう』(からかい歌)  
 『饅頭買うたら』(からかい歌)  
 『ゆうたちゆうの』(からかい歌)  
 『よういいだこ』(からかい歌)  
 『鬼の来ん間に』(からかい歌)  
 『坊主坊主山芋』(からかい歌)  
 『さよなら三角』(別れ)
12. 子守歌 (全23曲中8曲)  
 『かおかおやおよ』(遊ばせ歌)  
 『きっこうばい』(遊ばせ歌)  
 『この子はどこの子』(遊ばせ歌)  
 『ねんねこよ』(ねさせ歌)  
 『ねんねん猫のけつに』(ねさせ歌)  
 『ねんねん小山の』(ねさせ歌)  
 『お子供衆お子供衆』(ねさせ歌)

まず、今回の調査に先だって、二度の予備調査を行った。

・予備調査 I

日時 2003年1月8日(水) 午前9時から10時

大富 智子(山口大学院生) 安原 雅之(山口大学教官)

内容 始業式に出席し、紹介をしていただいた。園児と慣れ親しむために日本のお正月の遊び紹介に参加したり、その様子を観察しながらコミュニケーションを図った。

・予備調査 II

日時 2003年1月21日(火) 午前9時から10時

訪問者 大富 智子(山口大学院生) 安原 雅之(山口大学教官)

沖 恵里子(山口大学学生) 寺戸 春弓(山口大学学生)

内容 1回目の継続。各クラスを見学し、話したり一緒に遊んだりした。また様子をビデオカメラやMDプレーヤーで記録した。

予備調査の目的は、園児たちの日常的な活動の状況を観察することと、被験者である園児たちと慣れ親しむことであった。幼稚園児を対象とする調査は今回が初めてだったので、園児たちが日常的にどんな活動をしているのかを知っておく必要があった。また、就学前の子どもたちが対象となるため、筆記による通常のアンケート調査は困難である。その代わりの聞き取り調査をすることにしたが、そのためには園児たちと慣れ親しんでおくことも必要であると考えた。2度の予備調査によって、これらの目的は達成できた。

予備調査IIの1週間後、本調査を実施した。以下は、その時の報告である。

## 「わらべ歌」調査の報告

- (1) 調査日時 2003年1月30日(木) 午前11時から11時30分
- (2) 調査対象 山口大学教育学部附属幼稚園星組(年長児) 52名
- (3) 調査目的 『山口のわらべ歌』に掲載されている山口市に伝承されるわらべ歌が今の子ども達に伝わっているかどうかを知る。

(4) 調査対象曲

調査対象として、『山口のわらべ歌』所収の山口市に伝承されるわらべ歌のうち、「遊び歌」を選んだ。その内訳は「手まり歌」14曲、「羽根つき歌」3曲、「お手玉歌」3曲、「手遊び歌」13曲、「鬼遊び歌」3曲、「外遊び歌」7曲の43曲である(「調査対象のわらべ歌一覧」を参照)。

これらのうち、『あんたがたどっこさ』『せっせっせ』という歌いだしの「手合わせ歌」、『だるまさだるまさ』『かごめかごめ』『おにさんこちら』『郵便屋さん』などは全国的なものとして解説されている。この他にも『まるかいてチョン』や『ひらいたひらいた』も全国的に知られているものである。

## 調査対象のわらべ歌一覧

### 手まり歌 (14曲)

『船の船頭さんに』  
『一つ人びと』  
『一つひよどりや』  
『ひいふの三吉』  
『一番はじめが』  
『おんしらしらしら』  
『西や東の』  
『あんたがたどっこさ』  
『山のちよんちよんぎす』  
『れんげ女郎』  
『ござれ友達』  
『向かいの山へ』  
『向かいの米屋の』  
『とんとんたたくは』

### 羽根つき歌 お手玉歌 (3曲)

『ひいやふうや』(羽根つき)  
『ひとりきな』(羽根つき)  
『おひとつおとして』(お手玉)

### 手遊び歌 (13曲)

『せっせっせ』(手合わせ)  
『一つひよこが』(手合わせ)  
『じゃんすけさん』(ジャンケン遊び)  
『だるまさだるまさ』(顔遊び)  
『おおやぶこやぶ』(顔遊び)  
『子供と子供と』(指遊び)  
『一が刺した』(指遊び)  
『一山越えて』(指遊び)  
『三重の重箱に』(指遊び)  
『ありの道や』(絵かき歌)  
『のりこんで』(絵かき歌)  
『一さ一さ』(絵かき歌)  
『まるかいてチョン』(絵かき歌)

### 鬼遊び歌 (3曲)

『かごめかごめ [一]』(人当て鬼)

『おにさんこちら』(目かくし鬼)

『ようかくれ』(かくれ鬼)

### 縄とび歌 (3曲)

『たわらのねずみ』  
『おじょうさん』  
『郵便屋さん』

### 外遊び歌 (7曲)

『ひらいたひらいた』(輪遊び)  
『山の婆山の婆(1)』(たこあげ)  
『山の婆山の婆(2)』(たこあげ)  
『あいつら』(むくろじ遊び)  
『かまつくろ』(砂遊び)  
『てんてんてん車』(手車遊び)  
『ここは大海の』(通せんぼ)

その他、現代ではあまり知られていないが、当時は全国的にも類歌も多いとされている『船の船頭さんに』、『一つ人びと』、『一番はじめが』や江戸時代の浄瑠璃をもとにした『ひいふの三吉』、『おんしらしら』がある。また、山口の方言を用いていて県下全般で歌われていたものに『山のちよんちよんぎす』、『向かいの米屋の』、『ひいやふうや』などがある。

## (5) 調査方法

メンバー 大富 (山口大学院生) : 進行  
沖、寺戸 (山口大学学生) : デモンストレーション  
安原 (山口大学教官) : 記録

それぞれの曲について、園児たちが識別できるかを調査した。まず、調査対象の曲を学生が実際に歌って聞かせ、それぞれについて、知っている曲であれば手を挙げるという方法を取った。対象となるわらべ歌は全曲歌うのではなく、知っているか知らないかを大富が判断した時点で止めて次の曲に移った。

この調査では、次の2点が問題となった。

- ① わらべ歌は、似たようなリズムや音型が現れるため、判別が難しい場合がある。
- ② 曲数が多かったため、集中力が持続しにくい。

わらべ歌は、付点のリズムの連続やテトラコルド\*<sup>4</sup>による音型など共通の特徴を有するため、似たような曲調が多く、それ故、聞いてその場ですぐに判断することが難しい場合もある。また、調査時間が30分に及んだため集中力が持続しにくかった。調査の途中、絵描き歌では、実際に黒板に絵を描いて見せるなどして集中力が途切れない様に試みた。

このような問題はあったにせよ、楽譜が読めない子どもたちには、この方法を取らざるを得なかった。

調査を開始して1曲目、1人の女の子が首をかしげながら手を挙げた。明らかにその曲を知っているという自信はなかったようであった。それにつられるように次の数曲は数人の園児が拳手をした。しかし、これらの曲は上記のような典型的なわらべ歌の音型とリズムを持っており、幼児がどこかで耳にしたことがあるような気になっても不思議ではない。しかし、確信をもって手が挙がらないこと、その曲を歌えないことなど曖昧な面が見られ、本当に知っているかどうか疑わしく思われた。そこで、それ以降の曲については知っている場合は手を挙げ、さらに一緒に歌うという方法で調査を続行した。拳手だけでは判断ができなかったが、実際に歌ってもらうことによって、本当に知っているかどうかを確認することができた。

#### (6) 調査結果

上記の調査の結果、園児の手が一斉に挙がって、一緒に歌い始めたわらべ歌は、次の8曲であった。

|      |                  |
|------|------------------|
| 手まり歌 | 『あんたがたどっこさ』      |
| 手遊び歌 | 『せっせっせ』(手合わせ)    |
|      | 『だるまさだるまさ』(顔遊び)  |
|      | 『まるかいてチョン』(絵かき歌) |
| 鬼遊び歌 | 『かごめかごめ』(人当て鬼)   |
|      | 『おにさんこちら』(目かくし鬼) |
| 縄とび歌 | 『郵便屋さん』          |
| 外遊び歌 | 『ひらいたひらいた』(輪遊び)  |

これらはいずれも、全国的に普及しているわらべ歌であり、園児たちは、調査対象とした全43曲の内この8曲以外は知らなかった。

しかし、これら8曲の内『郵便屋さん』は、『山口のわらべ歌』に掲載されているものとほぼ同じであったが、残りの7曲については、歌詞が異なるもの、旋律が異なるもの、あるいは歌詞も旋律も異なるものなど、『山口のわらべ歌』に掲載されているものとは相違点があった。

まず、歌詞が異なっていたものは、『あんたがたどっこさ』、『かごめかごめ』、『ひらいたひらいた』である。

下記の対照表から明らかなように、『あんたがたどっこさ』の場合は、3行目までは同様であるが、中間部の「狐」と「狸」という違いが見られ、後半の2行も異なっている。



歌詞対照表 (1)

|  |  |
|--|--|
| <p>『あんたがたどっこさ』(山口市)*<sup>5</sup><br/>         あんたがたどっこさ 肥後さ<br/>         肥後どっこさ 熊本さ<br/>         熊本どっこさ せんばさ<br/>         せんば山には<u>狐</u>がおってさ<br/>         それを獵師が鉄砲でうってさ<br/> <u>切って</u> 焼いてさ 食ってさ<br/> <u>ああうまかったとさ</u> 菜の葉でちよん</p> | <p>『あんたがたどっこさ』(一般)*<sup>6</sup><br/>         あんたがたどっこさ 肥後さ<br/>         肥後どっこさ 熊本さ<br/>         熊本どっこさ せんばさ<br/>         せんば山には<u>狸</u>がおってさ<br/>         それを獵師が鉄砲でうってさ<br/> <u>煮てさ</u> 焼いてさ 食ってさ<br/>         それを木の葉でちよいと<b>かぶせ</b></p> |
|--|--|

また、『山口のわらべ歌』には、次のような記述がある。

全国的にうたわれている手まり歌であるが、山口県下では昭和二十年代に流行した。歌詞も全国一様で大きな違いはない。ただ「狸がおってさ」とうたうところが多く、「狐」とうたうところは山口市のほか、下関市、阿武郡むつみ村にある。<sup>\*7</sup>

この歌については、他にもさまざまなバリエーションがある。例えば、出だしが「あんたとどっこさ」になっているもの、<sup>\*8</sup> 最後が「ちよつとおつかぶせ」になっているもの、<sup>\*9</sup> 途中が「船場山には／蝦さがおってさ／それを漁師の／網さでとってさ」になっているもの<sup>\*10</sup>など、さまざまである。

その例を見てもわかるように、全国的なものとは言っても地方によっていろいろなバリエーションがある。同様に『かごめかごめ』、『ひらいたひらいた』についても、歌詞の部分的な相違が見られる。(歌詞対照表(2)を参照)

歌詞対照表 (2)

|  |   |
|--|---|
| <p>『かごめかごめ』*<sup>11</sup><br/>         かごめかごめ かごの中の鳥は<br/>         いつもいつも <u>ねや</u>ーる<br/>         四日の晩に鶴と亀がすんべった<br/>         あとだあれ</p> | <p>『かごめかごめ』(一般)*<sup>12</sup><br/>         かごめかごめ かごの中の鳥は<br/>         いついつ <u>でや</u>ーる<br/>         夜明けの晩に鶴と亀がすべった<br/> <u>うしろの正面</u>だあれ</p> |
| <p>『ひらいたひらいた』<br/>         ひらいた ひらいた<br/>         なんの花が ひらいた<br/>         蓮の花が ひらいた<br/>         ひらいたと 思ったら<br/> <u>みるまに</u> すぼんだ</p>    | <p>『ひらいたひらいた』<br/>         ひらいた ひらいた<br/>         なんの花が ひらいた<br/> <u>れんげ</u>の花が ひらいた<br/>         ひらいたと 思ったら<br/> <u>いつのまにか</u> しぼんだ</p>      |

いずれの曲も、歌詞の前半部分は同じであるが、後半部分に相違が見られるのが特徴である。例えば、『かごめかごめ』の場合は、「夜明けの晩」が山口では、「四日の晩」となり、「うしろの正面」が山口では、「あと」となっている。

次に、歌詞は一般的なものと同じだが、旋律が異なっていたのは、『まるかいてチョン』、『おにさんこちら』の2曲である。

対照表(1)から明らかなように『まるかいてチョン』は、冒頭から旋律が異なっているが、「ミ、ソ、ラ、シ」という構成音は同じである。また、園児の歌った『おにさんこちら』は出だしは同じであるが、後半部分の「手のなる」の部分が「おにさん」と同じ旋律であった。対照表(1)を参照。

『だるまさだるまさ』では、歌詞も旋律も異なっていた。

対照表(2)から明らかなように園児の歌った『だるまさだるまさ』は出だしの「だるまさだるまさ」だけが同じ旋律で歌詞については、全部違っていた。園児の歌った歌詞は「だるまさん だるまさん/にらめっこしましょ/笑ったら負けよ/あっぷっぷ」であった。対照表(2)を参照。

『せっせっせ』で始まる手遊び歌も山口市に残っているものではなかった。

### 歌詞対照表 (3)

|   |   |
|---|---|
| <p>『せっせっせ』(手合わせ)*<sup>13</sup><br/>         せっせっせ<br/>         うちのせどのたきよきるもの だれじゃいな<br/>         わしじゃおたけじゃ うじがみさまへ<br/>         (略)</p> | <p>『せっせっせ』(一般)*<sup>14</sup><br/>         せっせっせのよいよいよい<br/>         お寺のおしょうさんがかぼちやの<br/>         種をまきました<br/>         (略)</p> |
|---|---|

結局、ほぼそのままの形で子どもたちが知っているわらべ歌は、『郵便屋さん』1曲ということになる。

#### 郵便屋さん(縄とび)\*<sup>15</sup>

郵便屋さん 郵便屋さん  
 葉書が十枚 落ちました  
 拾ってあげましょ  
 一枚 二枚 三枚 四枚 五枚  
 六枚 七枚 八枚 九枚 十枚  
 ありがとさん

『郵便屋さん』に代表される「縄とび歌」は、「郵便屋さん、はよ来んさい(あるいは、おはようさん)」と「郵便屋さん、葉書が落ちました」の二系統の歌が、全国的に歌われており、また、縄とびの遊びは、明治以後、欧米から移入されたもので、大正時代以降とくに盛んになったとされている。<sup>\*16</sup>

「縄とび」について、小泉文夫は次のように述べている。

… “なわとび” のリズムが、それまでの日本の伝統的なリズムと著しく異なったものであり、これによって日本の子どもたちは、新しい遊びや単語ばかりでなく、新しい外来のリズムをひとりでの身につけることになったということです。つまり、伝統的なリズムでは、歌詞のあたまから手を打ったり、まりをついたりすればよいのですが、“なわとび” では歌のリズムよりも前に体の準備が必要です。拍子の前に跳び上がり、地面に落ちるときはじめて歌の第一拍と合うことになるのです。…\*17

「縄とび」という遊びは比較的新しく、それまでの日本の遊び歌とは異なるリズムと動きをもっており、今日の子どもたちにも親しまれている。そのことが『郵便屋さん』1曲だけをほぼそのままの形で園児たちが知っていたという事実結びつくだらう。

#### ・調査のまとめ

『山口のわらべ歌』所収の遊び歌の中から、山口市で採譜された43曲について、山口大学附属幼稚園の星組（年長児）の園児52名を対象に調査を行った。その結果園児たちは、43曲のうち8曲（『あんたがたどっこさ』、『せっせっせ』、『だるまさだるまさ』、『まるかいてチョン』、『かごめかごめ』、『おにさんこちら』、『郵便屋さん』、『ひらいたひらいた』）を識別することができた。しかし、そのうち7曲は、歌詞がまたは旋律が、あるいは歌詞と旋律の両方が多少異なっていた。残りの1曲（『郵便屋さん』）は、基本的に山口市で採譜されたものと同じであったが、旋律の細かい部分など、完全に同じであったかどうか疑問点が残る。

識別できた8曲と識別できなかった35曲の違いは、今日一般的に歌われているものかどうかである。言い換えれば、昔は一つのわらべ歌について多くの種類の歌が歌われていたが、現在では、そのうち代表的な歌が数種類しか残っていないということである。その理由として遊びの形態の変化が考えられる。外で大勢の友達と遊んでいた昔と異なり、テレビ、テレビゲームの普及で一人遊びをする子供が増えた。また、幼児期からおけいこ事、学習塾に通う子供が増えており、必然的に遊ぶ時間が減る。子供だけで安全に遊べる場所が少ないという現状もある。

わらべ歌が昔のままの形で数多く伝承されていないという現象は、附属幼稚園に限らず、一般的な幼児にも言えると予想される。しかし、昔のままの形ではないとは言え、いくつかのわらべ歌は、現在でも歌われている。附属幼稚園の子供たちが知っていたわらべ歌のほかに、現在では歌詞も旋律も変化しているが、おそらく原型であろうと思われるわらべ歌があった。調査時、学生が「三重の重箱に～」と歌い始めた時は手も拳がらなかったが、大冨が「これっくらいの～」と歌い始めた途端、下記の「おべんとうばこのうた」を一斉に振り付きで歌い始めたからである。

歌詞対照表 (4)

|   |  |
|---|--|
| <p>三重の重箱に (指遊び)*<sup>18</sup><br/>         三重の重箱に おむすびこめて<br/>         たたきごんぼに ごまふりかけて<br/>         椎茸か香茸か 青菜のおしら和えて<br/>         オホホホホ</p> | <p>おべんとうぼこのうた (作詞 香山美子)*<sup>19</sup><br/>         これっくらいの おべんとうぼこに<br/>         おにぎり おにぎり ちよいとつめて<br/>         刻みしょうがに ごましおふって<br/>         にんじんさん さくらんぼさん<br/>         しいたけさん ごぼうさん<br/>         あなのあいた レンコンさん<br/>         すじのとおった フキ</p> |
|---|--|

香山美子作詞の「おべんとうぼこのうた」は、NHK教育テレビ「おかあさんといっしょ」の中で歌われている曲である。「おかあさんといっしょ」は幼児に絶大な人気を得ている番組であり、この番組で歌われている歌や手遊び歌は全国の幼児に普及していると言っても過言ではないだろう。また、他の手遊び歌として「こぶたぬきつねこ」(作詞作曲山本直純)\*<sup>20</sup>、「パンダ・うさぎ・コアラ」(作詞高田ひろお 作曲乾裕樹)\*<sup>21</sup>、「げんこつやまのたぬきさん (作詞作曲不詳)\*<sup>22</sup>などを挙げるができる。

今日ではこのように、メディアによって広められた新しいわらべ歌も存在する。これらの歌は、従来のわらべ歌とは異なり、作詞者および作曲者による創作であり、また、旋律も本来のわらべ歌の音型とは異なる場合が多い。しかし、手遊びというわらべ歌によって行っていた遊びを継承していくという点で有効であると考えられる。<sup>\*23</sup>

わらべ歌、特に遊び歌に関して言えば、一人で歌うものではなく、1対1、あるいは集団で共通の遊びをしながら歌うものが多い。そこには必ず、人と人とのコミュニケーションが存在する。今日では、数人の子どもと一緒に遊ぶと言っても、一人はテレビゲームをし、一人は漫画を読むといった別行動をしている場合が少なくない。また、同じことをしている場合でも、皆が一斉にテレビの画面を見ている場合が多く(テレビゲームの場合)、そこには真のコミュニケーションは存在していない。

昔ながらのわらべ歌を伝承すること自体が最も重要というわけではないと考える。伝承の過程で歌が変容することは、わらべ歌の特質でもあり、新しい歌がわらべ歌として普及することも歴史的に起こっていることである。また、数こそは決して多くはないとは言え、今の子どもたちにもわらべ歌が伝承されていることは調査の結果からも明らかであった。前述のジャンケン遊びなどはさまざまなバリエーションのある遊びであり、現代の子どもにもわらべ歌は存在していると言える。

小泉文夫は「…子どもの遊びは、自分だけがたのしむものではなく、ほかの子どもと一緒に遊ぶためのルールとリズムがある」<sup>\*24</sup>と述べているが、それはつまり、わらべ歌による遊びを通して、子供たちは音楽性と社会性を育ててきたということである。また、『山口のわらべ歌』の著者の一人である河北邦子氏は「今のように電化製品もないため、家事に多くの時間がかかったり、また農作業などで昔のお母さんは忙しかったので、わらべ歌はおばあさんから孫へと歌い継がれていく場合が多かった」<sup>\*25</sup>と指摘する。

これらのことから、わらべ歌を伝承していくことの重要性は、人と人とのコミュニケーションにあるのではないだろうか。子供同士のコミュニケーション、あるいは世

代を越えてのコミュニケーション等、そこには、現代に多く見られるテレビなどのメディア対個人という一方通行の関係では得られないものがある。

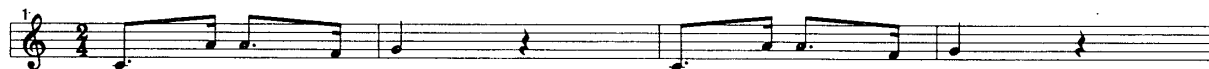
子供同士の場合を考えると、昔と比較すれば急速に失われているとは言え、前述のように数は少ないが、新たなわらべ歌を作り出してコミュニケーションを図っていると言えるだろう。

一方、世代間のコミュニケーションはどうであろうか。わらべ歌は祖母が孫に歌って聞かせるという行為を考えてもわかるように、子供同士に限らず子供と親あるいは子供と祖父母が1対1でふれあいながら歌ったり、遊んだりするものである。現代の社会においては、この世代間のコミュニケーションが一部の地方を除いてなくなりつつある状況である。世代間のコミュニケーションを図るためにわらべ歌の存在は重要であると考えられる。

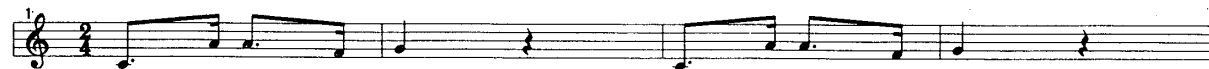
環境の変化で、家庭や地域での伝承が困難である今日の状況においては、幼稚園や学校などの伝承の母体となるべく組織的かつ積極的な取り組みをしていく必要があるのではないだろうか。

### 対照表 (1)

#### まるかいてチョン (園児が歌ったもの)

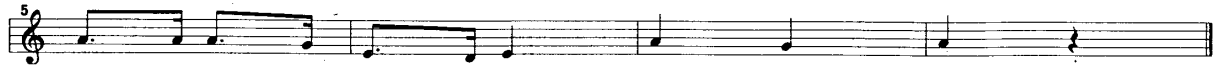
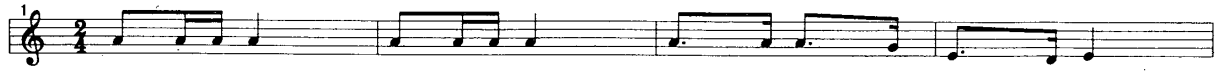


#### まるかいてチョン



対照表 (2)

だるまさんだるまさん (園児が歌ったもの)



だるまさんだるまさん



- \* 1 『広辞苑』(岩波書店, 1991年), 「わらべうた」の項, 2766頁。
- \* 2 『音楽大事典』(平凡社, 1981~1983年), 「わらべうた」の項, 第5巻(1983年), 2852~2854頁。
- \* 3 ここでは「子守歌」も含まれているが、一般的には「子守歌」は大人の歌う歌として「わらべ歌」に含まないことが多い。
- \* 4 小泉文夫は、わらべ歌の音階構造をテトラコルドといわれている音階、四度音程の枠を基本として考えた。
- \* 5 内田伸, 河北邦子『山口のわらべ歌』(柳原書店, 1992年) 52頁。
- \* 6 おそらく誰でも知っているであろうと考えられるわらべうたであるが、実際に正しい歌詞を特定するのは難しい。参照したものすべてにおいて多少なりとも相違点が見られた。例えば、町田嘉章、浅野建二『わらべうた-日本の伝承童謡』(岩波文庫、1962年)では、足羽章編『日本童謡唱歌全集』(ドレミ楽譜出版社, 1985年)「あんたがたどこさ」が「あんたとどこさ」に、近藤信子、柳生弦一郎『にほんのわらべうた③おてぶしてぶし』(福音館書店, 2001年)では、「ちよいとかぶせ」が「ちよとおつかぶせ」になっている。この歌詞は、ドレミ楽譜出版社編集部編『簡易伴奏によるこどものうた大百科』(ドレミ楽譜出版社, 1994年)に記載されていたもので筆

者が一般的と判断した歌詞である。

- \* 7 内田伸, 河北邦子『山口のわらべ歌』(柳原書店, 1992年) 52頁。
- \* 8 足羽章編『日本童謡唱歌全集』(ドレミ楽譜出版社, 1985年) 62-63頁。
- \* 9 近藤信子, 柳生弦一郎『にほんのわらべうた③おてぶしてぶし』(福音館書店, 2001年) 42頁。
- \* 10 友久武文, 原田宏司『広島のわらべ歌』(柳原書店, 1984年) 52頁。
- \* 11 内田伸, 河北邦子『山口のわらべ歌』(柳原書店, 1992年) 112頁。
- \* 12 足羽章編『日本童謡唱歌全集』(ドレミ楽譜出版社, 1985年) 161頁。
- \* 13 内田伸, 河北邦子『山口のわらべ歌』(柳原書店, 1992年) 94頁。
- \* 14 園児が歌ったのはこの歌詞である。この調査で園児が歌ったものではないが、『せっせっせ』で始まる手遊び歌は他に「せっせっせのよいよいよい/アルプス一万尺/小槍の上で/アルペン踊りを/さあおどりましょ/……」や「せっせっせのよいよいよい/みかんの花が/咲いている/思い出の道に/丘の道/……」などが今日の子どもたちの中で歌われている。
- \* 15 内田伸, 河北邦子『山口のわらべ歌』(柳原書店, 1992年) 120頁。
- \* 16 内田伸, 河北邦子『山口のわらべ歌』(柳原書店, 1992年) 120頁。
- \* 17 小泉文夫『子どもの遊びとうた: わらべうたは生きている』(草思社, 1986年) 112頁。
- \* 18 内田伸, 河北邦子『山口のわらべ歌』(柳原書店, 1992年) 104頁。
- \* 19 『ベスト! こどものうた』(日本クラウン株式会社, 1999年)
- \* 20 『NHKこどものうた楽譜集 第26集』(日本放送協会・日本放送出版協会, 1999年) 41頁。
- \* 21 『NHKこどものうた楽譜集 第21集』(日本放送協会・日本放送出版協会, 1991年) 8頁。
- \* 22 『NHKこどものうた楽譜集 第10集』(日本放送協会・日本放送出版協会, 1974年) 68頁。
- \* 23 一方、「ジャンケン」遊びのようなメディアとは関係なく、いつの間にか子どもたちの中で流行っている遊びもある。「ジャンケンポイポイ/どっちかくす/そりゃこっちかくす/あんたちよっとばかね/あんたよりましょ/ビームシュワッチ」「お寺のおじょうさんが/かぼちゃの種を/まきました/芽が出て/ふくらんで/花が咲いたらじゃんけんぽん」などがそれである。これらは、大富が在住している熊毛郡大和町の子どもたちが歌っている歌であるが、地域によって多少の言い換えがあり、現代のわらべ歌としては、数が多いと思われる。
- \* 24 小泉文夫『子どもの遊びとうた: わらべうたは生きている』(草思社, 1986年) 114頁。
- \* 25 筆者とのインタビューにおいて (2003年1月20日)

本論は、平成14年度教育学部研究支援経費の助成を受けて行なった「山口のわらべ歌に関する調査・研究」の報告である。